

功 勞 賞

安 達 廣 氏（国立大学法人大阪大学理学部技術専門職員）



安達 廣氏は昭和 44 年度国家公務員採用初級資格を取得後、昭和 45 年 1 月より大阪大学に文部技官として奉職した。そして大阪大学理学部化学高分子学科において分析機器測定室に所属し、質量分析装置を担当して同学科の研究活動を支える分析関連業務の一端を担うこととなった。

就任当時に同学科に設置されていた装置は日立の二重収束型質量分析計 (RMU-7HR) であった。同氏はこれを用いたガス試料を中心とする分析を皮切りに、その後導入された日立 (RMU-50) では固体試料の直接導入による測定対象の拡大に積極的に挑戦して成果を上げた。昭和 54 年からは日本電子の大型質量分析装置 (JMS-O1-SG) を用いて FD 法にも取り組み、従来は到底不可能であった幅広い極性あるいは高分子量化合物に質量分析が適用できることを多くの例で示した。このように同氏は、常に新しいイオン化法の発展に注意を払い、新しい測定法の導入とその普及に努めて研究活動を支えた。なかでも、複雑な生物活性複合糖質・リピド A およびその周辺化合物に質量分析を適用してその構造決定に重要な鍵を提供し、その後に世界的レベルで大きく発展する細菌由来の生物活性複合糖質研究に大きく貢献したことは特筆される。

平成元年 日本電子の磁場型質量分析装置 (JMS-SX-102) 導入後は FAB 法に組み込み、日常業務の依頼分析、装置の運用・管理と教官学生に対する技術指導などの主たる業務のほか、交久瀬教授や故松尾武清教授と交流して、積極的に測定技術の向上に取り組んだ。さらに平成 5 年、三連四重極型質量分析装置 (API-III) 飛行時間型質量分析装置 (MALDI-IV) などの導入に伴い、教官学生が測定する装置として半ば開放されているそれらの保守と円滑な運転にも意を用い、一般使用者への技術指導を行って現在に至っている。またこの間、理学部・理学研究科で研究される極めて多様な多くの新規化合物群の測定はもとより、当時まだ測定例の多くなかった有機金属化合物の測定にも、その分野の研究者と協力して取り組んで多くの問題点を解決し、この分野の飛躍的な発展を側面から支えた。

平成 8 年ごろからは、「生物学研究会」「生理学研究会」「機器・分析技術研究会」などに積極的に参加して、ポスター発表や討論を通じて全国の大学、高専、共同利用機関において研究支援業務に携わっている技術系職員とも連携して、質量分析技術者間のネット作りに取り組んで、全国レベルで技術や知識の交換と人的交流に大きな役割を果たしている。

平成 11 年 11 月には「機器・分析技術研究会」(福井大学)に参加し、その機会に伊佐教授のもとでタンデム質量分析装置を用いた新しい測定の知見を得たほか、質量分析学会のネットワークも積極的に利用している。そのような積極的な姿勢と努力で、分析担当職員としても指導的立場にある安達氏は、平成 12 年度近畿地区国立学校技術専門職員研修で依頼を受けて ESI-MS について講師として講演を行った。

安達氏は質量分析学会にも積極的にかかわり、平成 11 年 5 月に開催された質量分析総合討論会(吹田)においては会場担当委員、平成 15 年 1 月の田中耕一ノーベル賞受賞講演会でも当日委員としてその成功に大きく貢献した。

数々の新化合物の測定を通じた研究への貢献、学生や若手技術者の指導による知識と技術の普及などという質量分析装置担当技術者としての安達氏の長年にわたる積極的かつたゆまぬ努力は、折からのイオン化法を中心とした質量分析そのものの革命的な発展とも相まって、質量分析ならびに学会の発展に大きく貢献してきた。よって日本質量分析学会功労賞にふさわしい者としてここに認められた。